墨美嚢

雲

正札 七一

へ 5
1436

墨水消夏録之序

母らのしし蘭洲翁のあつめ給へるを
こと実なりやおしや紀氏の土佐日記
えてとなのに物かれの書ぞんやうに
をなあかしやさかしう旧紀の下りの猶
余りしてたのしよきとしめきてそ
うちてあいはが長明の海道記といふ紙
流しけ吾妻路土産を比しもそれ
うすふる元政の身延なうてやらふ詣

乃松しまめぐりなとよのきふくされ家
いろしよ盛衰しまくんいのちもれたる
まよふ物識男能者穂く出ぬるより
惜しき好身の嵐によゆらひてえく
毀誉得失の中にもちとやあるらん
しかはさる我説翁の翼のおそ
まらて此せ之も俳諧の一節をあやまり
まさしふ莫まする種の彩りもれくさる
よりく桜しろく然あるるも尓
らねくかしまく風さくれず射山す

家のその称にもありかたきものもなく
元禄俳諧の宗匠なくして花よりひ豊
撰しく又ねかりて手のをして残
ありさ風をや蕉翁に我みる若翁おつる
ては葉の秋なりんとも名に呼へる我
みちのきのや松かれ雲もきんてあるか
影る筑紫の汐え残ありうく出
難波津の梅もおもひしさへしも
うりくいさもしぬかひの旅へしもけれ
て故郷よりゆうかのおもかけり世次

みよしのゝ松かけいさてなんつかみ
しられやうねてゝ飛梅さうふ神垣よ
も詠しけるありや風雅の情けは染
たまものうちかはらし船の入津より
瓊の浦輪よしさま〳〵へのへさしてあそふね
ぬけ浮世外にしも遊はんとてめくく
かゝれ出ぬるしみやつのふこをまさの
ことをそへさきくたよ朝咏暮作の風流
をたくせるよわのふし乃好京佳
今のありの仰にてはやめよふれつる

学ふ風よそのほまれ百韻歌仙のゆかり高
きとしてあまた花をこゝにあつめしかれ
うし里ふ花もゆかりと夫人目にとまらん
ぬ人の情ともなりとて此川や亦玲瑯
に撰しいまゝくちも其閲とも屋
つまねともさるへしれ情これを閲す
るふ諸子山海の業務ちうかれたの
も作事多情にまかせて声あるとし
と趣よくも雅頭の風骨をあらわれ
えくはさらしも花をさくる利を営みの

寧よひとしのゝあはれをかほふるの
志のいそぢよきはあそびて趣よ
猶まよのうへてすゝむといふ

浪花散人

寛政庚戌春　不二庵可撰

送別小序

洛東　芭蕉堂　闌更

長月菴はあるじ旅に星霜或ふゑ多す
三十とせのまりあふは之路にや清き
あり体ゟ之都に援婦へしらしといへとも千盃の
酒よ知音を求す一盞乃出茶に志己哉
忘れさきはかしこは秋のふ星に帰らん

まこと我告来るに嘹唳のかりのゑんを書かう
けふハ枝葉れ外の風流をわすれむと

后乃月にさそはれし人をまちわびよ

かく蟋鳴をさふしで銭ぬたし縁にそく

同

洛東 夜半亭 几董

長月庵のぬし浪花にありて中秋而思

乃おくる我名月やさゝれ空を水のうへと
此句を懐ふして我洛東乃艸庵我
設き半日の落話ゆうら済水の宗を談し
きのふゝと年一とひ祇園に赴くゆよし丈へける
ふりさそひし離情も袂をうるほす語れし

春哉また川に日けうん門のちり柳

我師若翁の
旅立を送る

甘棠子

来る我も川顔のを
袖や露しほれ

曇華囊雲之巻

長月庵若翁著

清くしるる宰府の梅紅葉招きく且ハ故山乃月を捨るけきハ門人憩春と同船しす下るむるり我計をる旅ふなれハ世路ふさくハといそ来るさりかるく給ふるひぬ市夏杉ならひ立し行脚なれハ芋菴ハ五明堂ぬぬしにとみえときこえ

兄る嘉来和神と君るね秋の川

天明丁未九月十三日阿岐の国の船にたよりて
あかしなる波江を発す
兼てやくそくありしかはたらひし去来
阿るハ洛の宗匠にて禅に長し小庵なる
陀仏に於きて道の志ありとせしぬを外
舊遊新知の志ふかしきかおりもれむあまして
こなたの橋まて送来るいと哀れなる
午時を過して潮汐に向ひて須磨の浦に
碇を入る許に見をよせ来る浪にあらはれきること
詠しまひし昔のあはれを今の暮秋におもひ

何も皆て様さかれしう浅瀬をと
日も斜すゝき吹ちるや須磨乃岸
こよひハ明石川に泊る人丸明神に登れハ十三
夜の晴光かきりなく江山冷て社殿上久く栄
えつゝに立せまふ祖翁の墳塚もいしを
往時を感す
たこ壺や翁の塚ハ後乃月
海上四日にしてあまの廣島て忌宴に家
合の中に長門の国乃人あり家にかゝやうもおもひより
九州渡海ハ自由なりしもむかしく日数を過し

こゝにも無益なしとおもひ出より陸路を取てくたり
さ侍りて某所のみゝとなりまいらす處きなと
祢もころにいひかはしけるは宮寺にきはめぬ立お
すそうの玉宝の木といふにありて渡る

十七日　岩国錦帯橋一見す瀬ゝ大河に
五つの橋を一すちにかけわたし流をも柱をたてゝ
洋ゝの花間の長虹春江に映するとおもふところの裏
乃工ゝ亦祢なるの水の清適なるも天津橋下
陽青の色なしむへし
　むかしの袁凡清くらかりぬ秋乃水

六乃むきて山坂多く険岨の境に心を労す風
光ゑ捨こゝ寺ありかしこに茶店ありなといへるに
寺院も寺をに落て社のはや見えぬ只此邊草
家ゐにすむ鮭夕照まいり小酔るかなし
　茸さらり梅の香に似て酒白し
宮市より右に入大内家代々の舊址山口を見ぬ
鋳山といふ所にて大雨崩谷を雑せたま千
窮途のおもひをなせりからうして傍の小家を
かりてやとりしき一夜を明す
山口里は肥人豊なり大内氏一たひ覇王創業

乃意ありて九重の封疆を摸寫せしなりと
かや悠々たり三百年英雄の陳迹市鄽のミ
其形を残せり樓臺ハ林丘と変し秋の
夕の蝉乃声寂々寥々としてあはれしく
懐舊のなみだを催さしむ
三ヶ山館太神宮ハ内外の二はしらを祭り迎へて
欝石のあとありといと殊勝なる居なりける
九州のミなる人をして賽して伊勢乃代と
なせりとし社家町亦富貴にみへける

法樂

雨後の御階露おき合す雨乃袖

又此途中乃力となりし原松のこ某ハ此山中と
いへる處の者なりけれしまゝにて送りまいらせし
すなはち後しきまゝ我を其家にて見てもてなし
其細るいとやさしき志なり名ハ藤八といへるいち
者なりける季

廿三日　松のこかひくしくろれと馬にうちのせ赤
間ヶ関に送る櫃の浦ハ海岸に漁家軒お
なへて亀白踏雪清く峯居てなむさびしき境
なるを元暦のむかしをおもひ出馬よりかりしてる時

うつりまて寒き秋風千鳥す

移りけり秋やむかれみなし蟹

阿弥陀寺ハうす墨れ松のこ色をかへし天皇寺を
壁落て荒ゆるひとまりきしとやりて再造れし
心ある詣来る人きく入まゐ次第あるさし取て迄
多く拝しまつる

垣ゆふて御廟を造れみしきい

近年此地の風士造立せしとて祖翁の塚阿弥
陀堂の前にありけはくハ花乃上なる月夜哉
乃発句を刻す

おのみ観音崎百樹亭をあるしとして六七日杖ひ
やすむ

舞乃松ゆく蘇う妻をとてむふを

董里羅風南菓を外とけ遂訪ひ来りて席を
ミしまぬ

十月朔日豊前の小倉に航して夏夕をとこ孫
よはれ東江亭にゐましも深折し瓶の菊花
を生ふ見へるを

遅く来てうゐし小春れ菊乃宿

此夜渭水訪る素流南昭なと来りて奇仙あり

翌日右此人とふいさなひて廣壽山ふ登る福聚
寺といふ即非禅師の開基ふして黄檗一派の大
伽藍なるを方丈ハ紅楓松柏の間をそへたりて高
乃照葉もみち上に映ま十八所の禅房まくに在て
山深し寂しきうへハ鐘磬の音ひゝき富る方
まゝ絃歌乃聲をきこゆなる無し
冬此山をみちに僧のまこと老ま
五日　馬成か芙容舎ふ招かれさく此菊花
筒耳つまりとこゆ主人の風流をなすをりとす
けまうに覚へを急ふ

後兼此時宴了出て亡日和う那
一日渭水ゟ成と共ふ郊外ま逍遥まきくれ出濱
越色ゟ東北山耳帰る其ハ小倉侯の祈願所
ふして延命寺と云止観の寂朗ゟ山海乃
眺望こはやうなり柳乃浦大里ハ文字か関ふ
続き硯の海を前耳流る六連島ふし海を
藍乃畑をはかなりて玄海の大洋をうし語るま
又山中に三觀亭ありま乃所殊ふ絶勝なるこ
終日爰に遊ふといへとも美景ふ魂をうはれて筆
句作し得ず此事なり

九日　木賜に招れ席上如是菴が記を即席に
眼前の風景名ところ筆にうつしの語るまゝ哉
志ろく筆ものハしまりしめて文字乃奥に
住居参りし火桶によりし語る向ふまゝ

十二日　祖翁忌智鏡菴會莚其前に呈す

忌句

木乃道や清くしもなき山眠る

宴に祖翁の塚あり八九間の柳を其しるし
よろし柳塚と称すといふ

木猶馬朱に迎て西町東比京に清ふ是より

昼夜四吟の俳諧数巻に及ぶ

十六日　木乃地を去て筑前国へ入る木屋瀬乃
駅より右に鞍手の川をこえりて

鳴鴨に国の廣さや冬田清る

植木里月湖を訪ふやどり連ハ香月氏にして
世ゝ此地に豪富の名あり居宅いやしからぬ主人
風雅に志厚く旅の情よく志ら家族ともよく
人をもてなし旧識のおもひ不知何處是他郷
といひしもかゝる味の事也翌日出立て奥
座舗に席をあらため前栽乃設なりし百年の

けしきを見せけり

冬しらぬ種譲りうけし家居かな

浪華の西翁病に臥てまたありと尋てまず梧
亭にいたりなし語りあひてかへりにけり
東方の君花文沙我を見まて今日我に黒田
家の大夫立花氏秋水にあひ出撫ありて東方
逗留の折から吟行を清くゆて待まゐらすよし
一句を残して文沙に托し去る

去月庵の集中にいつと見なうる
出るとも出るところ

鷹にも拝まれぬけさの寒さかな　秋水

君文の友子我を携て東方へ帰て君花に仍ひ
社を旅館として主人はさきに赤宮か厚に篤
知己となりにゆくにやわらきて懇なり
霜月朔日多賀宮にお詣して俳諧興行

神の為霜降けしく樹々あらし

あくらは風士日々集りて月雪の風流を尽す
残り帝の行をとふして見越年をさくにききしも
文沙が隣白菴にとまりまして一日遊ふにも此菴は
諸九老尼の跡をとどまりしところなれりさればは園生
の冬げしき梅のときはいまた水仙かしこまりて

におゝき一すちの仏を拝せりけれは懐旧の
一句をそしむ
紫の戸や鎖さし付てみる主降
ほとなく師走にうつりて越せは旅窓人該すいと
淋しくなる冬こもりして十日はかりや雪の大に
降りけれはひとりおちて
住侘ひのうき世や雪の枳殻垣
春の後はていけおしくなすおわさし故田圃に
於ろす鴈鴫の声麻咲の耳を驚かしぬれさしりしと
文沙ひとりおく音信さ示ヶ悲情をなくさむ

風談志きりにすゝみて年のはりを志りし次去年
の乃花のすき人なる無し
菜蒼吟
猿に使されて持ちやきもちも迷菜蒼
戊申正月元日眠叙す菜の桐吟茶百句ゝ暁寅
乃刻備尾すなわち多賀ま入年納まいの時午から
方にあとりて雉子の啼されは
みさうりは閨は晴し楽きし雉の声
三日　郊外に杖を曳て
花さけも梅乃株なり棄えとけ

ちるハしきまりや老の里いおろき

十三日　植木の香月氏を再ひ訪ふ子息濱桂
まろあひて浮玉亭ふきしむ西余り帯ゐ
文沙を訪て迎来りて俳諧文数席
飯塚の詩人高滄江俳人依兮笹久里ハ其両
亭を訪るひとおふさよとてはりて席を交へ
切先を約して帰る

二月六日大雪降りし濱植水月亭を開きて
宴を設く六の花峯北青月吉川堤乃梅花
照し清香ある盃て汲とり一座与に余し

て詩あり発句ゐと亭ハあつし此求ふ應してまた
亭の記をも略す

きのふよ月ゆき花のよし川や

十五日　浮玉亭を辞して文虎とへ赴く主人
夫婦両所聖渡まて見送るおよひハ文沙ニ至ふ
一宿して翌日飯塚謙亭ゐる依兮か矑臺に
逆らまて此地の人とふ告す
矑臺ハぬしハ荘子也福あり哉慕ふみもあへ次
只りかく福ふり茶ふ矑りて俗中に俗をまぬ乃
一室に遊ること里まて折ちら老木の梅一樹あり

こゝろの春室にいまゝめくまんいし閑なるを
　まだ咲ぬ花や茶釜ハ才川乃音
老父素柳ヵ隠室ハ秋川にかよりたより菜にな
む麦に雲雀に舞の風日春色をそへしむ庵あや
まこやうなる翁有り是ハ帰りに俳壇をたゝき
或ハ滄江ヵ杏陰に座とりて漫に詩をいふ
いと猿の如く走り旅寐なる趣し
廿二日　舎丁ヵ許にまねかる此亭やゝ十と歩
山本の市ヵ官禄にうとし床やとりしなる爰有りそれ
後池魚の哭にかゝるとして物換りすゝめも亦

哭なりし庭上に梅の老一樹存せり
　やり梅の老ても花をむかしうれ
晦日　竹西ヵ此君亭会莚へ会の餐集ハ雑品
乃最上なる楽
　花乃宿翁と蕎麦振舞しきる季
三月六日　其両を尋て笹久里へ赴くにのく茶
臼山まで見送る升両ハ途中に友となる庵よ
よしみある先に進む滄江門人元泰閻美も
ちりこ升筒なと携へて坂下茶店まで来れ
廿年に寄志あるに似たり

石坂のけハしき路十余丁雨降出てあやうし
八木山なる土氏の家をかりて晴をまちけるま
よりかり坂一里余雨なほやまんやうし木戸と
いふところにいたりぬ

二乃木戸や桜を見る夕まくれ

暮に及ひ笹久里へ至り平井氏を尋ねし舎る
二三日雨晴す宴にこめし家舟両兄より序る
主人壺也亭は句帖あり予も求て進し法華
士のもとにくてまさん
若杉山乃精舎見え金出川の流るゝもめてたき哉

壺也中にちゞめし長き日月をたのしむ左翁乃
性安きうれ

事足りし花にこゝろは壽茶乃枕

九日　博多の亂魯を訪ませハよ語らひ迎て
あまりにてむ俚雪来て共に計て旅宿お称
名寺よきさむきにて聖坡か造立せし十七回
忌塔と刻したる祖翁の碑あり
ぬれきぬ塚石堂橋のかたはら往古聖武帝の時
筑前守にて下りし佐野近世か女継母のうたへに
無実の恋に名たてゝ父なる人に殺されしとかや

かうしてある海士のぬれ衣を女の袮屋に入
置しよりいよ〳〵いかり深くて殺害しけり
其後かの女夢中に来て一首の哥を詠じて
父になき名を我はらせしとや近世、我あやまりと
くやミ盛しける道心出家すこれを松浦上人と称
すなり

女のうた

ぬきしすれそのこやりのぬれ衣を
なかりきなき名乃たゞ免しなりける[illegible]

これよりしてなき名をたつるを錦ぬれきぬと云

ふるりとせん千載のうゝ今一堆の塚となりし哥
川岸の松のはるに[illegible]おはやくなる[illegible]
かきなそのぬれぎぬ塚乃西の後
箱崎八幡宮ハ本宗の奥に詣座ましまし楼門
乃額ハ聖武帝の宸華にて敵國降伏の四
字なる傍にしるしの松あり応神帝宇瀰まで
降誕の時胞衣の箱をしるしに納められし跡に
此乃名ありといつれ比岸の千代松京にきこゆ
霊地なり
もこ晴やなむちまもとる　松乃風

社地を発行て濱のうへ出れハ奈多濱といふ
海の中道ハ志賀の島ニ続き玄海島ハかすみ
に見えて見わたしに頂を見せり其餘の名蹟悉く
筆に述るに及ひかたし松原の中ニ太閤秀吉
休息したまふ處利休か御茶を奉し跡あり
おなし公の狂哥ニ

はこ崎の松ハ葉なりにまた似たり

立なるやうてまつぬハなし

箱崎中納言の口伝ニ出れし人ハ唐風乃やう
なる色きわり引のふましハ備きひきあれハふさを
をさめしとなれ狂哥とそこそ乃なりあへし前賢の
言感すかも恐多し

十一日　ハ清か此素梅市か旅宿を辞去て
伴ひて福岡城下酔鯨か五井亭に到る市中
乃隠室らしく住なして雨に老を養ひて

世を一重隔て甚た涼しき郁
風友日々入来るか折ふるふいと面白く其中ニ
魯白野陽の二子ハ毎席爾き次風強援群ニ
見へたり其両氣魯も所詠なり素柳なる
と語りてそいつれ敎書に及ふ

十八日　蝶酔ヵ従者を案内として太宰府へ
詣す福博より二里ばかり過て雑餉隈といふ所
茶店多し那珂郡なるは古語に人の許に重ね
内やりのわたを推乃へ様くるならば雑餉すと
いつきし接するに益太宰の師なりし人下向乃時
此地の官人ども駕を迎へ人ときぬくの酒肴を捧
来りて待うけまつりしこと見えたりよくよく今の
名存せりとぞ御笠の杜は神功皇后旋風に御
笠をとられさせたまひしが此杜にかかりたるより
名とせられるよしなん水城の址は天智帝築せさせ

所にして異賊襲来の要害なり屏屋といつきぬ
刈萱の関なりやあらむとなりし都府楼乃址は薮の
うしろ田の中に礎二三十遺れり
都府楼の高き見えしやゆふ雀
好古の人はさくねて尾瓦を拾ひ袖にして帰る
奥州多賀城跡と同し観音寺戒壇院は古
佛の七観音を安置次いまし一は律院なりしが
いにしへの代より源家と変せりいまも大なる
礎のありて都府の址と知るなりおめひ川町の入
口の小流なり

安樂寺聖廟の地ハ楠の大木数株ありて池ハ
心乃字に澄うり樓門の内ハ梅松桜多く八重
さかり今盛なり飛梅ハ御殿に傍て屈曲
す去年の秋此邊所のむ紅葉相まんと難波
津をわたりて立寄りしか變くに滞る事まとて
其葉ハ却て緑なるやく賓しきるに千
載不朽の神徳只るかく覚て志はし涙を
落しき無る

何となくて社殿の表乃色

大鳥居小鳥居ハ社務の在る家にして菅原

血脈のかんとより代ゝ継せ給ふと我も外坊
舎小路く小甍をならべて繁栄かきりなし
光明寺ハ禅宗にて渡宋天神此所に立せ給ふ
門前の流ハ藍染川なり其下に傳衣塔あり
傳云菅神渡宋の時徑山寺無準和尚より
袈裟を授與せられし故此所におさめ給ふとや
怪岩奇樹凡境にハあらず是より東北の方
千石のう川を上とよふ川とりて右に霞るとき
山ハ竈門山なりやまさくらはなりにさこ語く
烟を吐きやしまるに和哥をよみあハせなとさも

あら趣し名蹤ありし先兄めぐりてそをおもる
花臺坊に舎る翌日帰路攝寺むさしの温泉
一见す天判山は出乃温泉の上に突兀たり
廿日　五竹亭をおきて北に西の方へ赴く
生の松原海邊の清き砂地なりけるは清まさり
いきのまつ川と世にいひしに一むら枯果て只一樹のこ
此神乃まつに御手ありきとりて手を乗へて是をは
ごまなりの武隈の松は古のようひ詠もなしとよみ
けんるをおもひあいまは此あまり能古の島かやの
山韓泊なりといへ是も名をしるなかりき原田種直が

墳路傍藪中は昔にて清む地ところにかゝりしといふ
催し肥前国に入濱崎の松たてる末あひさ也望
駒嘶山嶺八九折を攀ること一里余絶頂乃
棲雲とひとし
山坂峰や名ところぬるも帰るとて
柄嵜の温泉に浴して旅の労を補ふ
廿三日　大雨なれ笠を透し膚志めりて曳杖
すゝ漏すらに笠を病身の悩りなりし交人不抗し
俵坂といふ所にて遅き日御没せんとするは
北風起て雨なる豪なり三五郎といふ士民

我を伴ひて一宿を許す此人は法華宗の信者
にて日々に千ヶ寺参なとやうなしけるをかく
れなき人とおもへるやいとおかしけれ於のし
彼杵里大楠は近年焼けりとぞ今又芽をふきて
旧きにかへりきて此人は空海大師の杖を立てたまふ
樹なりといひ伝ふ
此地の朝長氏昌沢は先年東都に在し昧うききみ
親友なるとなりよりを十餘年先に古人となりしに
其子昌碩慈に我をとて光てあまし居宅
新しく海山の眺望又佳なり向ふ屋しと望に

すのせて
ゆく春を湛へて海乃夕の紫
は婦は殊ぬきのち朔日市に出て一夜をとこのふ
中〳〵に糸條貰はぬころもく
僧味外来る三人と共に船めよひして大寄
と川越に遊ふ富家何某に請せられきおりしらけぬ
鳥をやらぬ
古麦を橋干たる背戸のおかえんか
九日　祖東大村の峻翔を伴ひまかり家を迎へ
て月藤亭に居を移す其後旧遊親族追〻に

来て對して再會に逢うき新舊に飲み殊に我
志らぬ孫ともの膝のもとにすりよりてあそふ有さまハ字
共うち固くさくるまするを稚き名るも何わりしりむ
いとおかしきれと

廿一日雨ふ小百合まてして子ら堂ふまぬ
さ房きみちしめ下岳にわ周面来て我をつれて此地ヲ
むかへんことを約す
峻翅再ひ来り主人ともに同船して下に到り
ここ浜海上五里ばかり小風に帆をあけ暫時に
忘ぬ周面が迎て兄の園御亭に伴ふて帰る

皐月はじめ十日なりけり
兼て耳にふれたる鳥香れ追門兄人とこ人兄弟を
携へ此日小船に棹さし柳か乃二ハ大村乃
内海と称するに西海にし言討尾の深渡より
滄海の潮を引入南北の限り東に横はりて八里
ばかりの曲江なり其中に島乃数凡五六十大
なるも聳次小なるも亦麗として備はし廣き所ハ
松嶋にまさり挟き所ハ象潟に髣髴たりされど
むかしより歌人も来らざる惜哉かかる名勝の地の
書るもの世に埋れたるかなと思ひ絶りす二三

子し且かつ語り且嘆して吟魂を悩しむる
何の浦某乃壽なとし巌なくしうに松あり人
宗豊饒なり中にも三島といふ所ハ數嶋背に
山にかさとり白鶴千株に巣くひ珠樹に附に
花咲き形を彼なよさて八納涼乃仮席を
設く

松陰やすゞしき時夏にハいきのひる　祖東

おくのほそ道にハゆふきよき時鳴又殊絶なり往古観音
大士此所に來り舟一ツの跡しかりしとそいふ
風薫るかしやゆるきさら波　峻翅

鳥居の川を渕ましハ鳥居乃松左右にあり観音
堂ハ此乃岡にうちせたまふ登りて拝すれハ諸木
蕭森として雨聞の古風まさに世を厭ふ人
乃住居をき境なりと書けらく草堂にんを此して

声うきや櫟のハ花に落る音

棹を回して三しほに迫門をおはれハ清きれ
空いよく晴て稍しまいなかうしき暮を起し
ちとり島ハいく年稀さ絶ぬ昇ちる波おもふハ安宅
嶋ハ領主釣魚臺の礎を存しむ子しゆハ
鶴乃卵もりもえくとり農崎ハ大将何某公

畏きすめらぎ石花こしめ矢筈しは八弓ハ袋にと
御代を祝して網子ともがうたふ声きこゆ操しま
大森島に友の日を並ひなして八木京の里
浅川氏の亭にやどる
きのふの残興捨かたく又三嶋より南の方食場
川口にいたるに引きかへ流る三ところに千切き去島
中の嶋ハ農民の家居縄つき蛋の子どもの貝
おろし里のとりなの子苗と成姿ひかえまを
亦おかしすゑの此あたりハ碧海隔りて桑田と
かりそめと見へて前嶌翁乃為法いちしは八

田の中に甸甸するがごとく山神のほとり松ハ八幡乃
杜の山さくら名高しされを江山で死せん人を
うれしきもし便を求て遊観すべきよまなる一し
とれのくさふやきて閑游亭に帰りぬ
十五日　閑游兄弟とし先て風月の道に入兄を
呑江樓月游弟を象幽軒裏椎と名付く
廿一日　徂東峻翔帰るて後ハ象幽軒に移りて
日数兄弟に名を説てさこみのまことしき茶志て次
梅旭又かきのれ人となりぬ
六月八日たの乃滝の森雨いとしくいみじきにく青に

思ひへしやらん風流ハ戸を破り壁を落す珠に
蝦鰹柚姫乃類悉くにありて鯨魚類の旅寐
祖翁飯坂にむかし哉おもひいでさせて愛日

さゝら浪小いわしを油にて一へ　常堂

十一日　香江樓へ帰るきゝふより雨晴大野の
えまに青月まれやかなれハ兄弟我をさそひすけて
中乃島の去堤に涼をとるふともに纔一句哉
吐えす粉白観実せしやこりの風情をさそえす

江と山乃あひいハ涼き夜の月

みまかあはりにも去庇ハ香江樓の胡床井ゐ子も
絵尽しのきは去るにまの蓮乃あけおのとゝ妙緑
ぞよかすなハ老の身の海路お忍にかけしも夜推
ありさふ

十五日　恵了院の琴睡をとは清月下の門哉
うちとけをおとろき飲ひてあまし悦にけ僧和我と
竹馬の友ゐしをも四十とせ余り昼てふて
昧意をとらへ且かくに老や清をさするゝ哉
かれしこゝに訪うちかえぬ

うちとけて語らんすゝ名涼しき夜

十七日　時津浦上にすき人事歩付て来り集る

月激も記て志らひありて語らはす
廿三日　長崎へ赴く友椎又にふ大徳寺院家
そ舊識ゆへ川添登儿ハ熟情厚くして乃ちあを
旅宿とすなきよしゅなれに留ぶ
廿六日　此地の俳人玉淵を訪ふそ外玄々坊
所平榮園なとと彦をあひぬ
七月朔日
むく起の帯は売りやけさ乃秋
讃州るる松は禹柳近年此浦の人となりて萬屋
町に丹竈を設かまふ盛ちは醫や市俳諧にあそ

し味は玉の俳傑なりしをゆゑあり今月章に
萍合して大に力を得たりしは尾中に金を拾ひ
泥中に珠を得るといふ類なりしむ
十四日十五日は妻教ちぶ乃浦の例として山丘は
墓所に燈籠の火影しなし然て見る人を
驚かし月夜移りしもの

長崎や盆は二度もかくし詠

今夕紅毛船二艘入津そお清客乃船十余
艘来居て繁栄なしにまさまり
廿七日　梅唐の名を聞て旅窓を設く也に

いさなひて指竹亭にまかりぬしや洛の園叟と
暮ふかくまて乃車文なとし風文深きよしみの志ゆ
まうこひ盛して

月見近しかれぬしとなき友とおもひ

此夜はなは文に思はすも後之人入門して左琴を改
名呼といつる人もありてそれに入より

良夜　去年のおもひは路波のなかには捨まて来し
乃空も水の上と郷情の甘川なりけ我や侍りしの
今年のこよひをみなたとしちりき瓊の浦に在なから
帰るへき休いましも到りしたを嘆しく

旅なれて月見る宿ハなきものを

十六日　ちかられしおすも来ふ三十とせを過し
あひたる旅に夫すきおくましと語りしは
連舟ものとあそて切しみ髪の寄

廿五日　青龍山天満宮祭禮にまかりて拝ありし
聖廟ハ寛永年中鎮臺牛込氏感得乃霊
像にて梅香崎の海岸に社座ありしを孤人
を移し元禄年中今の地に移したりとなん旧地の
名のよりて梅香崎天神とあうくるとなん別當
大徳寺ハ密宗にして御朱印頂戴の一大地

けらし殊に和漢交易万代海上安全の祈願
所なれバ諸人の渇仰も亦格別なりけるに
むかしの賑ひ旧地ハ今ハ清客の船も稀なく
寂にして當地乃衰微をしる川原なるや
是より後ハ病に侵され筆をとる次院家に療ミ
にまかせて志はらに療養を加ふなり
九月九日病中吟
人帰醉ん菊にも侍りしくまり鳴
十月十二日禹柳左琴来りて予が祖翁忌ハいつ
なりやと申侍りしに敬すニし力付けるゆゑ地しける

やまひを扶け共に資福菴にの昔をいさしの懐旧哉
いとなむ
うれしさハ火やきてもあハ津なる松の風
長崎に尾花塚ありと風俗文選に見へたるハ
むかしことばを志れす魯町卯七等の跡を
追ふすき人もなけれバ塚の代りて頽廃せし
みやまきにさゝけて次悲む處し此地乃不
雅なるを我を俘沙康といふ者志りて札塚を
きづきとし其地蕪穢にして志も倍碍に
混せりたる又けしむる埋もれ野坡が徒なく

いひ立一黨をむすひ互に奔走する族と
なれは風雅といふ事を志さきハひとつのみち
蓮門を汚すに似たり
霜月十日頃より寒氣に染してやまひ大きに
募て積氣痰喘胸膈の間に闘ひ命絶するに
至りあやうしといへとも今ハ力盡體労さるれともまた
なき冬乃姫死期旦暮に迫まり旧里より親
族驚き来りて病牀をまもるか中十二日に
道にとりて尊き日なれハ臨終の大事とらし
赤こそ画像を枕頭に掛させ香華を供ふ如雄と

いつる歌しきりのこに書玄なるらハしき中墨を
口號嘆む院家慨ちかく臨ミまひ年来の
修行覺悟ハいふにおよはすかりけれハやうやく由筆
を操て

月雪の都あり我ゆくところ

かくて終に息の絶るを待居たりしおもむきなる
所旧里に良貞なる者ありて飛脚にて一刹那
あるひハまさを服するに夢のことし現のことく胸中
豁然とひらけて息人々地身ぬかこの人く
さきに力を得て脊中撫て粥なとすゝめ

夜ハ既にあけり出ぬ侭ハ次第に元氣いできて
出乃世の人にハきハまりなき身
十二月廿日施無畏山の閑室に入てこもりしに
病をやしなふ為しとて甚院にて侍る身呼左琴
病中より出ぬるさきにて実を侍りて利水と
いへる隠者ありちかくかよひて懇なりあれは[illegible]き
老情の深きちなみハ味をとりまき市中に哉
又おもしろき

よあけのけしきし　煤くもる

晦日　元氣も大かたそのかりぬ是ハ出羽山の

聖廟千年忌にあたりて梅吟梅花百詠を挙
道乃興隆と祈る
己酉元旦百詠満しけれは味おき木のくとあけ
けまし

待得より梅の御垣や花清白哉

正月を迎えてかより在やら筆に飛ぶきま
乃新案門に侍とひ入ぬ中にも魚三石斧
左琴ハ花羅のよより八日おきにも侍ひ
ちり川まて二三ハ道を知よ似より志きりに
予か扶杖をそえて如月のなかめより指弁

関東

亭に迎へ弥生ハ歡集堂ニ招くさしゝ浪花
乃名残もかく旅寝かくりて終ふ別を催しゝの
月は末の日后の色は露ゑ了離愁は涙
哉哉しく

町をも越して里哉

本越己了日ハ出迎へし